

借用語の諸問題

古 浦 敏 生

(I) 借用語一般について

デンマークの言語学者イエルムスレウによれば「何が借用の対象になり得るかは予言できるものではなく、すべてが借用され得ると考えねばならない。また一言語が借用に敏感であるかどうか、どの程度に敏感かを前もって知ることもできない。借用がどの方向に向かうかについて、一般的な法則を立てることもできない。要するに、二つの言語社会が接触する所ではどこでも、借用の可能性を考えねばならない。」

ブリュッセル大学教授ルロワは「借用語が容易に軽蔑的なニュアンスを帯びる」ことを指摘している。例えば、ドイツ語の Lippe は「唇」という意味であるが、これがフランス語に借用されると lippe 「前に突き出た厚い下唇」という悪い意味になる。

(II) イタリア語における日本語からの借用語について

harakiri 「腹切り」(1904-5年), kimono 「着物」(1905年)などは古い借用語であるが、近年、日本経済の目覚ましい発展に伴い、日本文化への関心が高まったため、日本語からの借用語の数は増加の一途を辿っている。ローマ大学のデ・マウロ教授の調査によれば「フランス語・英語からの借用語は別格として、日本語からの借用語は、スペイン語・ドイツ語の次に位置し、アラビア語・トルコ語・ポルトガル語・ロシア語・オランダ語を上回るほどの勢いである。」確かに、近年、日本の文学作品が数多くイタリア語に翻訳・出版され、その中には、イタリア語に翻訳されないで、日本語をそのままローマ字表記している語形がふんだんに登場する。これらを網羅的に蒐集し、いろいろな角度から分析することは、借用語研究上非常に意義深いものと思われる。

(III) イタリア語における日本語からの借用語名詞の性(gender)について

イタリア語の名詞はすべて男性か女性かに類別されている。こういった性の範疇を持たない日本語の名詞がイタリア語に借用される場合、必ず男性か女性に振り分けられることになるのであるが、その際、如何なる名詞が男性として、如何なる名詞が女性として採用されるのか？

(例 1) Vidi in un negozio di abiti usati a Shamisenbori un awase da donna.

「三味線堀の古着屋で、女物の衿が目についてから…」(谷崎潤一郎『秘密』)

(例 2) Si ricordò delle sue geta e dei sandali di Kimi abbandonati quella

notte nella foresta di Urayasu. 「(幸二は)あの晩、浦安の森に置いてきた
彼の下駄と喜美のサンダルを思い出した」(三島由紀夫『獣の戯れ』)

(例 1)を見ると、awase には男性の不定冠詞 un が付いているので、awase は男性名詞であることが分かる。また、(例 2)では、geta に女性複数の所有形容詞 sue と「前置詞 di + 女性複数の定冠詞 le との融合形」delle が付いているので、geta は女性であることが分かる。では、何故 awase が男性で、geta が女性なのであろうか？

日本語からの借用語の性は、その借用語の意味内容と最も近似のイタリア語の語彙を想定し、その語の性を採用するというルールに従っているように思われる。例えば、awase は、vestito 「衣服」という男性名詞が脳裏に描かれた結果、男性として示され、一方、geta は scarpa 「靴」という女性名詞の影響で女性となっている。

ただ、この際、近似の意味内容を備えた語彙がいくつか存在し、その中に男性名詞・女性名詞が併存した場合、いわゆる「性のゆれ」がしばしば現われる。例えば、geta について言えば、上述の女性名詞 scarpa 「靴」のほかに、男性名詞 sandalo 「サンダル」との競合が原因で、時として男性名詞になる場合もある。

いずれにせよ、日本語からの借用語には、男性名詞が圧倒的に多い。筆者の調査によれば、その比率は、男性名詞 7 に対して、女性名詞 1 の割合である。

(IV) 今後の課題

こういった日本語からの借用語の性の問題は、イタリア語以外でも、性の範疇を有する言語なら面白いテーマとなりそうである。例えばフランス語の場合、イタリア語のような語尾からの連想(語尾が -a に終わる名詞は女性とする)がないためであらうか、イタリア語よりもさらに男性名詞の比重が大きいように思われる。谷崎潤一郎『瘋癲老人日記』の同一箇所の翻訳((例 3)はイタリア語訳、(例 4)はフランス語訳)を参照されたい。

(例 3) Sono di Tokyo, ma non mi piace la Tokyo di questi giorni. 「己ハ江戸っ子ダガ、近頃ノ東京ハ好キジャナインダ」(Tanizaki: Diario di un vecchio pazzo, traduzione di Atsuko Ricca Suga, 1965, Milano, p. 37)

(例 4) …quoique j’y sois né. Je n’aime pas le Tôkyô d’aujourd’hui. (Tanizaki : Journal d’un vieux fou, traduit du japonais par Georges Renondeau, 1967, Édition Gallimard, p. 41)

ここでは、同じ「東京」という名詞が、イタリア語では女性として、フランス語では男性として用いられている。この種の用例の蒐集・対照は今後の課題であらう。

参考文献

拙稿『イタリア語における日本語からの借用語』(広島大学文学部紀要、第49巻特輯号 2、1990年1月、pp. 1-91)

拙稿「『イタリア語における日本語からの借用語』資料補遺」(広島大学文学部紀要、第50巻、1991(近刊))